

ちょっと勇気があれば 障害者の働く場はつくれます

—下関水陸物産株式会社—

職場
ルポ

EMPLOYMENT REPORT

(文) 清原れい子 (写真) 小山博孝



下関水陸物産株式会社

〒750-0014 山口県下関市岬之町^{はまのりょう}10-6

TEL 0832-23-7284 FAX 0832-23-9100



嶋田達雄社長

下関水陸物産は、現在、観光客でにぎ

「乾燥」「自動化」した工場

「いまは減塩と言われますが、粒うには塩とアルコールで固めていくものから、その手加減が微妙。職人としての技が問われます」

工場は、想像していた水産加工の製造現場とはまるで違っていた。うにのいいにおいがかすかにただよっているが、生ものを扱っているという感じはしないのだ。

「いまでは、生うにはどこでも食べられるようになったが、一昔前、うにと言え、粒うに」(アルコール漬けのびん詰め)が主力だった。その発祥地は、山口県下関。本州と九州を隔てる関門海峡に面した下関は、壇ノ浦の戦いから今年のNHK大河ドラマ「武蔵」の舞台、巖流島と、歴史の舞台に幾度も登場してきた。ふぐ(地元では「ふく」と言う)も、下関ブランドが全国に知られている。

わう唐戸市場の近くで、一九四五年に海産物販売業として開業し、五〇年に現在地に移転して、粒うにのびん詰め製造を開始した。水産庁長官賞を受けた「職人塩かげん」をはじめ、これまでに数々の賞に輝き、粒うに、練りうに、うにあえものなどのうに製品のほか、ふく一夜干し、くじらステーキなどの下関名物も販売している。

一階が事務所、出入荷センターと売店、二階から四階が工場になっており、窓からは関門海峡が一望できる。社員は四七名。工場で働く人たちは二二名。取締役工場長の柴田孝さんに、まず工場を案内していただいた。

「いまは減塩と言われますが、粒うには塩とアルコールで固めていくものから、その手加減が微妙。職人としての技が問われます」

工場は、想像していた水産加工の製造現場とはまるで違っていた。うにのいいにおいがかすかにただよっているが、生ものを扱っているという感じはしないのだ。



柴田孝工場長

うに製品の原料は、殻から取り出した「むき身」の状態が入ってくる。最初にトゲ、殻、海藻などの異物をピンセットで取り除く。その選別は人の目と手が頼りだ。根気がある、ていねいな作業が続く。

「機械ではむずかしいんです。全部手作業ですが、きちんとできているかどうか、品質に影響します。神経を使う大事な部門です」

ここでは、心臓に障害がある人と下肢に障害がある人が働いている。

「うにの粒をつぶさないこと。トゲ、海藻などの異物を見逃さないこと」がコツだそう。

選別後は、洗びん、充填、ラベル貼り、ほとんどが自動化されている。

「うには水を嫌いますので、水を使うのは器具の洗浄だけです。これほど乾燥しているとはと、みなさんびっくりされます。約三十年前にいまの社屋を建てたときに機械化して、一昨年ぐらいままでに機械を新しく切り替えました」

うに製品の製造業者は家族経営が多く、充填機、洗びん機などを導入したJAS認定工場は、下関に下関水陸物産ともう一社、神戸と東京に一社ずつと、日本に四社しかないという。

バブルのころ、うに製品は会社関係のお中元やお歳暮によく使われたそう。

「一びん三万円のものという注文もいただきましたが、いまはそういう話は



粒うにの選別作業



選別作業をする内山淳さん（写真上・左）と
的野和子さん（写真下・左）

めったにありません。パブルがはじけてからは、百貨店だけではなく、量販店も含めて販売しています」

創立五十周年記念に 社会貢献を

会社は二〇〇〇年に創立五十年を迎え、社長の嶋田達雄さんと役員の方々は、何か記念事業をしたいと考えた。

「お客様への利益の還元と、さまざまな社会貢献として、工場で障害者を雇用しようということになりました」

とは言え、嶋田社長に心配がなかったわけではない。とくに食品に関する安全が厳しくなっていたときだった。

「作業については障害者に向いている部署があるだろうと思いましたが、多少

の不安がなきにしもあらずでした。食品を扱っていますから、万が一事故でもあったら、その人たちのせいではなくても、ハンデイのある人たちが働いているからだと言われるかもしれません。そうなったら、働いている人たちに申し訳ないし、私も困ると思いました。しかし、役員と相談して、障害者雇用はいいことだからと決断しました。それから、工場長が熱心に取り組んでくれます」

それまでに営業関係で心臓が悪い人などは働いていたが、工場には障害がある人は一人もいなかった。工場長の柴田さんは、ハローワークに相談に行った。

「担当者から、トライアル雇用というちよūdい制度がありますと教えていただき、地元の知的障害者更生施設『よしみ園』から二人を紹介されました」

柴田さんのもとには、現場から不安の声が届いた。

「『どう接すればいいか』という不安が大きかったですね。最初はお客様を迎えるような、はれものにさわるような感じでした。責任者二名をつけて事前のミーティングをして、『とにかくふうに接してください、いけないときはいけないと怒ってください』というアドバイスをよくよしみ園の先生からいただいて、取り組みを始めました」

よしみ園から、伊藤英雄さんと佐野正子さんが働きに来た。

「伊藤さんは、前任者が六五歳で嘱託を辞めることになり、洗びんの作業にチャレンジしてもらって、すぐに部署が決まりました。知的障害者にどんな仕事に向いているかがわかりませんでしたから、佐野さんにはいろいろやってもらって、工場の掃除やタオルなどの洗濯、器具の洗浄などの担当に決めました」

三カ月のトライアル雇用の後、二人を二〇〇〇年六月に本採用した。

「健常者との融合ができるか心配でしたが、一人の社会人として、ここで働けるかどうかをまず判断しましょうということから入りました。現場サイドでは忍耐がいると思いますが、何回も繰り返し教えるのは当たり前と思っていますので、よく協力してくれています。トラブルはありませんね」

その後、「まだ障害者にできる作業がありそうだ」という話をしたら、ハローワークの担当者に「障害者の合同面接会に参加しませんか」と誘われた。そこで、身体障害者二名と精神障害者一名をトライアル雇用した。原料のうへの選別作業についての身体障害者二名は、すぐ仕事に慣れた。精神障害者は、「ラッピングの経験あり」との履歴書を見て採用したが、ラッピングの種類が異なったため、仕事をこなすのがむずかしく、佐野さんと同じ仕事をするようになった。

「精神障害者と接するのは初めてでしたが、ほかの社員と同じようにつきあいました。仕事もまじめに取り組んでいましたが、鬱になると対応がむずかしく、仕事以外に問題が出てきて、周囲の人たちと溝ができてきました。障害者職業カウンセラーの方や病院とも相談して、何とか続けられないかと考えましたが、病気が回復するまで自宅休養をということで、契約期間がきた一年後に退職しました」

■「三位一体」の協力があれば
定着は早い

二〇〇一年春には、山口障害者職業センターの紹介で、宇多村季美子さんが就職した。

「欠員はなかったのですが、家も近くでしたし、実社会の経験をさせてもらえ

ませんかと言われて採用しました」
職場定着に向けて三ヶ月間、職業センターからカウンセラーが週一度会社に来て、家族も協力した。

「目標を設定して、毎日、家庭と日記のやりとりをしました。カウンセラーに家庭の指導もしていただき、三位一体で協力しました。早く自立させたいという願いもあって、家庭のしつけもしっかりしていましたので、最初はキャップシールをかぶせる速度が間に合いませんでしたが、いまは健常者と変わらないくらいのスピードで作業しています」

作業したいアイテムをタッチパネルで呼び出してセッティングするという、ラベルマシンの作業はすぐマスターした。
「アイテムの原材料の表示確認は、漢字が入るのでむずかしかったのですが、

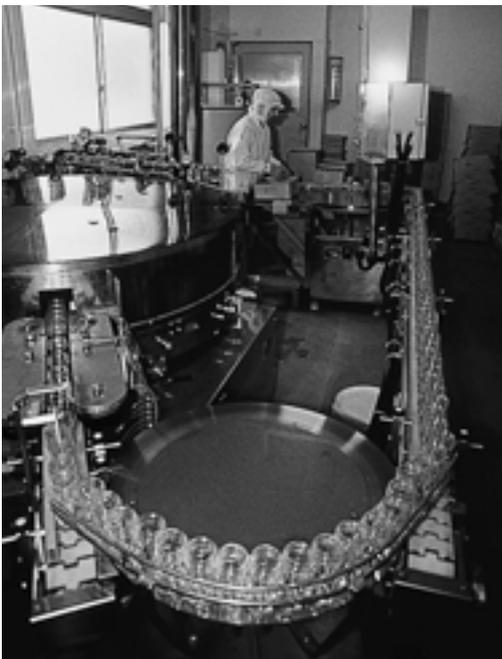
いまは何種類かの漢字はマスターしています。最終出荷前の段階ですから、健常者が確認するようにしていますが、ラベルマシンの操作は八割方こなせるまでに成長しました」

就職してまもなく二年。いまもときどき昼休みに、父親から「がんばっていますか」とメールが入るそう。宇多村さんは仕事が終わった後、知的障害者のバスケットボールチームで活動し、障害者の人たちとスキーへも出かけた。

「メールやコンピュータゲームはしますので、簡単なパソコンの操作がマスターできないかと期待しています。チャレンジすれば、可能性はあると思います」
初めて知的障害者を雇用してみて、柴田さんが感じることはいろいろあった。
「事業者、家庭、行政が三位一体で指



洗びん機を担当する伊藤英雄さん



導をすると効果が上がると思いました。家庭の協力があると、進歩も自立も早いですね。私生活には干渉していませんが、清潔さ、しつけや行儀など、私生活の延長線上で問題のある人もいました……」

学校教育、就労支援関係者には、就労までに身辺自立をしっかりと指導してほしいと改めて思った。

「忠実な社員」です。 勤務後、飲むのが楽しい

待遇は、身体障害者は健常者とはほぼ同等。知的障害者は健常者と同じ人も、最低賃金適用除外申請をしている人もいる。

「職種や能力に応じて、一律でなく給料を決めています。工場の方針として、単純工、専門工、多能工にわけていますが、障害者は単純工から始まって、伊藤さんや宇多村さんは専門工あたりまで上がってきていますね。社員には有能な社員、忠実な社員がいますが、障害のある人たちは間違いなく忠実な社員です。休みませんから、作業の当てにできます」

休憩時間。伊藤さん、佐野さん、宇多村さんと、「先生役」の三浦桃恵さんに会議室に集まっていた。柴田さんを囲んで、笑顔があふれる。

伊藤さんと佐野さんは五〇代。これまでに何か所かで勤めてきた。

「最初は何もわからなかったけれど、

みんなに教えてもらって、もう仕事は慣れました。ここに来るまでは道路関係の仕事をしていましたが、みんなによくしてもらえるから、このほうがいいです。会社の人は親切です」

「ほんとのこと言っているよ」と柴田さん。

「先代社長のときから家族的な雰囲気会社ですが、新年会、忘年会ぐらいでしか接する機会がない事務部門の人たちは、まだはれものにさわるみたいな感じがありますね」

宇多村さんにとって、三浦さんは「お姉さんのような人、いろいろなことを教えてくれる人、やさしい人」。今年成人式を迎え、会社からお祝いをもらった。

「厳しいときもやさしいときもあります」と言う佐野さんは、さまざまな仕事



びん詰めラインでキャップとラベル貼りを担当する宇多村季美子さん

をしてきた。

「この仕事はまあまあです」

「それぞれに向き不向きがありますが、いいところを見極めて引き出すのがむずかしいのですが、いまの仕事はそれぞれに合っていると思います」と三浦さん。

「比較的単純作業をしていますので、ハンディはあっても仕事に支障はありませんね。みなさん、現在の職域でピタッとはまっているという気はします。適材適所だと思いますよ」と柴田さん。

伊藤さんと佐野さんはアルコールが大好き。仕事が終わった後、柴田さんここで飲むこともある。

「陽気になるのがいい」「お酒を飲んでいるときに楽しい」「あと八年、定年まで仕事をがんばらないといけませんね」施設の人たちと旅行へ行けば、職場に



道具の洗浄や清掃で活躍する佐野正子さん



知的障害者の相談相手となり、指導する三浦桃恵さん（左）

おみやげを買ってくる。柴田さんには特別にお酒が届き、バレンタインデーにはチョコレートも届く。

「その気持ちもうれしいですね。一年に一回、健常者も含めて個人的な面談をしています。障害者として下に見られてつらい思いをしたという話も聞きましたので、そういうことだけはなくそうと心しています。」

また、何か要望がないかと聞くと、長く勤めていたいと答えてくれますから、気持ちよく働いてくれているという気はしています。これからは、障害のある社員がどれだけ自立できるかが課題ですね」
柴田さんのあたたかな眼差し。三人の元気と明るさ。居心地がよさそうなこと

がしっかりと伝わってきた。

より働きやすい職場に向けて 健常者の教育も

山口県雇用開発協会の障害者雇用アドバイザー、原田美知子さんは、下関水陸物産に電話をかけるたびに、感じのいい対応をされることに感心しているという。

「元気のいい声で、とてもよい応対をされますので、いいしつけができています。上にも立てられる方が下を育てるといふ雰囲気がある会社だと思います。そういう中に障害者が入ったので、ちょっと目を配っていただくことで、定着ができたのだと思います」

会社のモットーは「日々前進」。今年の工場の目標の一つに、障害者職業生活相談員の養成を掲げている。

「今年、面倒をみる人たちの教育を少しずつやっていきたいと考えています。ハンデイのある人たちが働くことには大賛成ですが、雇用してからまだ三年足らずです。外部に話をするのはもう少し経験を積んでからと思っていたのですが……」と社長の嶋田さん。

「工場では、スペースシャトルに積む宇宙飛行士のための食品製造から開発されたHACCPという衛生管理手法を導入していますので、衛生教育が大事です。私たちが理解したことを、わかりやすく

具体的に教えていくためにも、相談員の講習を受けたいと思っています」と柴田さん。

障害者の雇用を始めてまもなく三年。選別作業に、身体障害者をもう一人雇用する予定だ。仕事をともにしている柴田さんの思いをうかがった。

「私どもが初めて障害者を採用して思ったことは、会社にちよつと勇気があれば、もつと障害者の雇用が広がるのではないかとことです。機械化されていても、ラインの一つの部署を任せるところもできますから、障害者の働けるところはどこかに見つけられると思います」

うには、私も大好物。あたたかなやりとりを思い浮かべると、「やまみ」のうのおいしさがいつそう増してきた。



会社の窓から関門海峡が見える